

体育授業におけるつまずきと、その指導法についての研究

石田 遥 (競技スポーツ学科 コーチングコース)
指導教員 村田正夫

キーワード：子供の運動の関わり 運動の二極化 つまずき

1. 緒言

近年子どもの体力低下が懸念されている。「子供の体力向上のための総合的な方策について(答申)」(中央教育審議会 2002 年)によれば、①体力・運動能力の低下、②身体を操作する能力の低下、③生活習慣病の危険性の高まりが報告されている。子供の体力低下が指摘される基となっているのは、毎年文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」である。この「体力・運動能力調査」の結果を見ると、子どもの体力は、年々下がり続けており、1980 年代の半ばまではテストの結果に大きな低下は見られなかったものの、85 年をピークに実施年が前年の結果を上回る結果は出ていない。社会では運動の二極化が騒がれ、「運動できる子」「運動できない子」に別れているのが現状である。この中で運動ができない子どもに対し、体育を行う上で様々なことが「つまずき」となって現れているのではないかと考えた。そこで本研究では、運動につまづく子供に対して、どの様なことがつまずきとなっているのか、そういったつまずきに対し、どのように指導していくかを考察する。そして子供たちの生活の多様化によって、子供の運動能力に差が生じており、その多様化にともなった個々にあった指導とはいったいどのようなものがあるかを同時に考察していくことを目的とした。

2. 研究方法

本研究では①年齢・指導年数に関係なく、男性 10 名、女性 5 名よりインタビューを行った。②最近の運動対策の成功例や運動に基づくアンケート調査を踏まえ文献研究を行った。

3. 結果と考察

インタビュー調査より、子供の運動低下はやはり見られた。その中で運動を求めれば、出来る環境は多いことが分かった。しかし、運動の必要性や重要性が分からず、運動が軽視され希薄化して

いる現状が見られた。子供たちのつまずきも、幼少期からの運動能力の獲得が不十分なために引き起こされていると考えられる。以上の結果から子供達には以下の指導が必要と思われる。①友達同士の言葉かけをさせること。自分も周りも成長させ、互いに関わりをもちながら楽しい雰囲気の中で、技能を高めることができる。②資料を活用し記録と評価を見て取れるように提示することが必要である。記録やスキルを見て取れることで自信に繋がっていく。③グループ学習形態などで主体性を持たせる方法を取り入れる。ひとりひとりに対して的確なアドバイスができることと、肯定的な言葉かけが必要となる。

4. まとめ

学校で幼いうちから少しずつ動きを習得する時間を教えることが出来れば、子供達には多くの良い影響を与えられると考えられる。体育の中で多くの子供たちが「できる」を経験し、自分の今後の生活に役立てられることが願いである。教員は何かつまずきかを的確に見極め、その個にあった指導が出来れば子供たちの運動スキルは必然的に向上すると言える。そして、将来的な運動習慣につながるような運動の楽しさ、大切さを理解し、体得させることにより、生涯における体力の向上、健康の増進、そして、スポーツに親しむことによる充実した豊かな人生につながることを体育を教える上での最終目標である。

参考文献

- ・立花龍司(2006. 4. 24)運動神経は 10 歳で決まる！
- ・子育て応援辞典
<http://www.yu2372.net/Child-1.html>
- ・榎岡義明(2007. 4. 1)体育あそび具体例集
- ・文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>